

## 4章『新しい仲間』 2

11月半ばのある日、いつものように、カノンとセシルがダンスレッスンで汗を流し終えた頃、プロデューサーの宇賀神と家祭がレッスン場に入ってきてきた。

宇賀神が家祭に目配せする。「カノン、レッスン終わったのなら、ちょっとだけ打ち合わせいいかな?」。家祭がカノンだけを別室へと呼び出した。

「は、はい……」。

(これまで、私とセシル、いつもセットで打ち合わせをしてきたのに、なぜ今日に限って、私一人なの?)。

カノンは少し首を傾げながらも、家祭の後をついていく。一方で、一人残されたセシル

# あみたん娘

The NOVEL

酒井 直行

④

もキョトンとしていた。

「セシル、君にはオレから話がある。ていうか、家祭は囲んだ。本当はセシルにだけ先に相談したくて、こうして面倒くさ

「私だけにお話って、なんですか?」。セシルが身構えた。

「不安がる必要はない。だって、2人にとってはあまりいい話

「サプライズ?」

「来月のクリスマスの日、君たちは晴れてCDデビューを飾るわけだが、実は、その日のイベント会場で、君たちに内緒の体でサプライズ発表をしようと思ってる」

「ちょ、ちょっと待ってください! サプライズなのに、なんで今、私にそのことを教えちゃうんですか!? 私がか知らなかったら、サプライズにならないじゃないですか!」。セシルが悲鳴を上げた。

「アホか。芸能界でよくやるサプライズのほとんどは、仕掛けられた本人たちも知ってるパターンがほとんどだぞ」。宇賀神が真顔で言った。テレビのサプライズ企画が好きでセシルにとっては聞きたくもない裏事情だった。



キャラクター原案 松原 秀典  
イラスト 那智 泉見

い段取りを踏ませてもらった。マツタク、お前とカノンはいつでも2人一緒だからな。こうでもしないと別々に話ができない。宇賀神がため息混じりに失笑した。

「え? え? まさか、あみたん娘、デビュー前なのに解散とか?」  
「そんなんじゃない。だが、そういう類のサプライズだ」